

# 言葉を探す、心を探す

小さな命の意味を考える会 代表 佐藤 敏郎



1963年宮城県石巻市生まれ。東松島市立矢本第二中学校主幹教諭。防災、国語を担当。  
震災で石巻市立大川小学校6年生(当時)の次女が犠牲に。遺族らで作る「小さな命の意味を考える会」を主宰し、HPや講演で様々なメッセージを発信している。女川さいがいFMのパーソナリティーとしても活動。女川中学校での俳句の授業が書籍、テレビ等で話題となる。

平成二十三年度は、牡鹿半島の海の町、女川の中学校に勤めていた。

何もかも流された町でスタートした新学期。

この前まであった建物が跡形もない、笑って声を交わした人も、いない。教師は生徒を励ます仕事なのだが、「頑張れ」なんてとても言えない日々が続いていた。「希望」とか「絆」といった言葉を耳にすることが多かったけれど、そこに生徒たちを、自分自身を、どう向かわせればいいのだろう。

そんな五月、生徒に俳句を作らせようという提案があり、国語科の私が授業を担当することになった。町はまだ瓦礫に埋もれ、家族を亡くした生徒もいる。「素直な気持ちで五七五に」と言われたが、そんなことをしていいのかと、直前まで大いに迷った。

不安は的中しなかった。生徒は、私の説明が終わるやいなや、指を折りながら五七五の言葉を紡ぎ始めた。まるで魔法がかかったかのよう……。:

どんなことを書いているのだろうと机をのぞくと、こんな句が目飛び込んできた。

見上げれば がれきの上に こいのぼり

瓦礫だらけの町で、下ばかりむいてちゃダメだと思って顔を上げたら、壊れた建物の上に、誰かがあげた鯉のぼりが泳いでいたという句である。解説も写真もない、たった十七音の文字を並べただけなのに。津波の威力、悲しみ、無力感、希望、……すべて伝わってくる。

故郷を奪わないでと手を伸ばす

／見たことない 女川町を受け止める  
ただいまと聞きたい声が聞こえない

／複雑な思いで見つめる 春の海  
窓ぎわで 見えてくるのは 未来の町

／ガンバレとささやく町の 風の声  
海水についたスズラン 咲いていた

／今は亡き おばと歩いた 浜の道

五月末、例年より一ヶ月半遅れの授業参観日があつて、資料の裏表紙に俳句を掲載した。多くの保護者が泣きながら読んでいた姿が忘れられない。

俳句は字数が限られているので、言葉を吟味することになる。大人でさえ言葉に言葉を探した。自分の心を探したのだ。「これだ」という言葉にたどり着いたとき、前へ進める何かが生まれたように思う。

以後、全校句会は半年ごとに行われることになり、私が転勤してからも続いている。風景や心情の移り変わりが感じられ、興味深い。たとえば、震災の一年後、吹奏楽部の生徒がこんな句を詠んだ。

あつたかい音のする 支援のフルート

あの授業で、悲しみに向き合う大切さを教えられたのは、私自身だったんだと、最近になって気づいた。



次号は、慶應義塾大学准教授 地震学者の大木聖子さんをお願いいたします。

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧いただけます。